

「神奈川より金沢まで沿岸図」について

神谷大介
吉崎雅規

本稿では、令和三年（二〇二二）度に横浜市歴史博物館に寄託された絵図「神奈川より金沢まで沿岸図」（以下、場合に応じて「歴博図」と呼称）について、その内容の解説をこころみる。

一、絵図全体の所見

絵図（一鋪）は折図（使用時に床面に広げ、保管の際に折り畳む形態）で、法量は展開時に縦三〇七・五センチ、横一三三・〇センチ。折り畳み時は縦二七・〇センチ、横二二・五センチ。縦に八枚、横に五枚、計四〇枚の料紙（美濃紙）を貼り継いでいる。絵図は手写され、淡く彩色が施される。補修・裏打ちの形跡はなく、近年製作された帙が附属する。

絵図の描く範囲は、おおむね武蔵国橘樹郡西南部・久良岐郡の沿岸部（現横浜市鶴見区・金沢区沿岸部）と、久良岐郡の内陸部（大岡川流域）である。北東の端は東海道に沿った神奈川宿と橘樹郡子安村の境界付近（現横浜市神奈川区・鶴見区）、北西の端は橘樹郡和田村と仏向村の境付近（現横浜市保土ヶ谷区）、南端は久良岐郡洲崎村（現横浜市金沢区）・野島（現野島公園）までが描写されている。絵図は沿岸部と東海道・浦賀道（大岡川流域）に沿った地域を実測的に描き、それ以外の地域については原則として描写をしていない。

絵図に表題は記されていない。また蔵書印等も見られない。絵図の北側、神奈川宿付近の余白に方位・縮尺・色分目録（凡例）が記されている。この部分で文字の頭側を地図の南に向けていることから、本図では南を地図の天（上部）、北を地（下部）としていることがわかる。これは横浜地域を広域的に描いた絵図のなかでは珍しい。方位表示は四方向（東西南北）のみ、縮尺（分間）は「図記量百間以一寸」とあるので、一間（曲尺）を一・八一メートル、一寸を三・〇三センチとすると、六〇〇〇分の一のスケールということになる。また、色分目録は「山」「海川」「田畑」「道」「堤」「村界」の六種類。ただし、前三種類については具体的な記号を色分目録では示していない。この点か

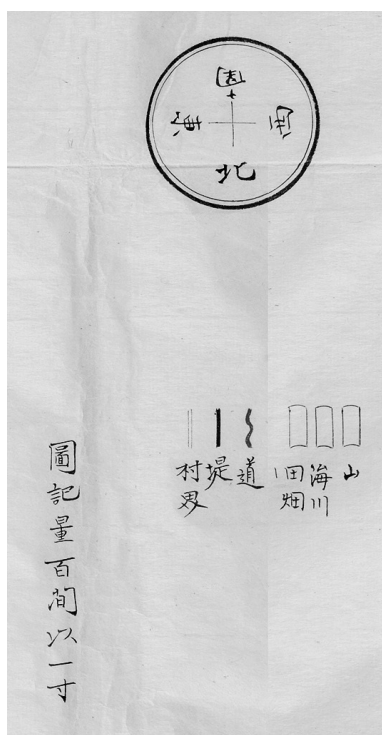


図1 色分目録部分



図2 「〔神奈川より金沢まで沿岸図〕」 (全体)

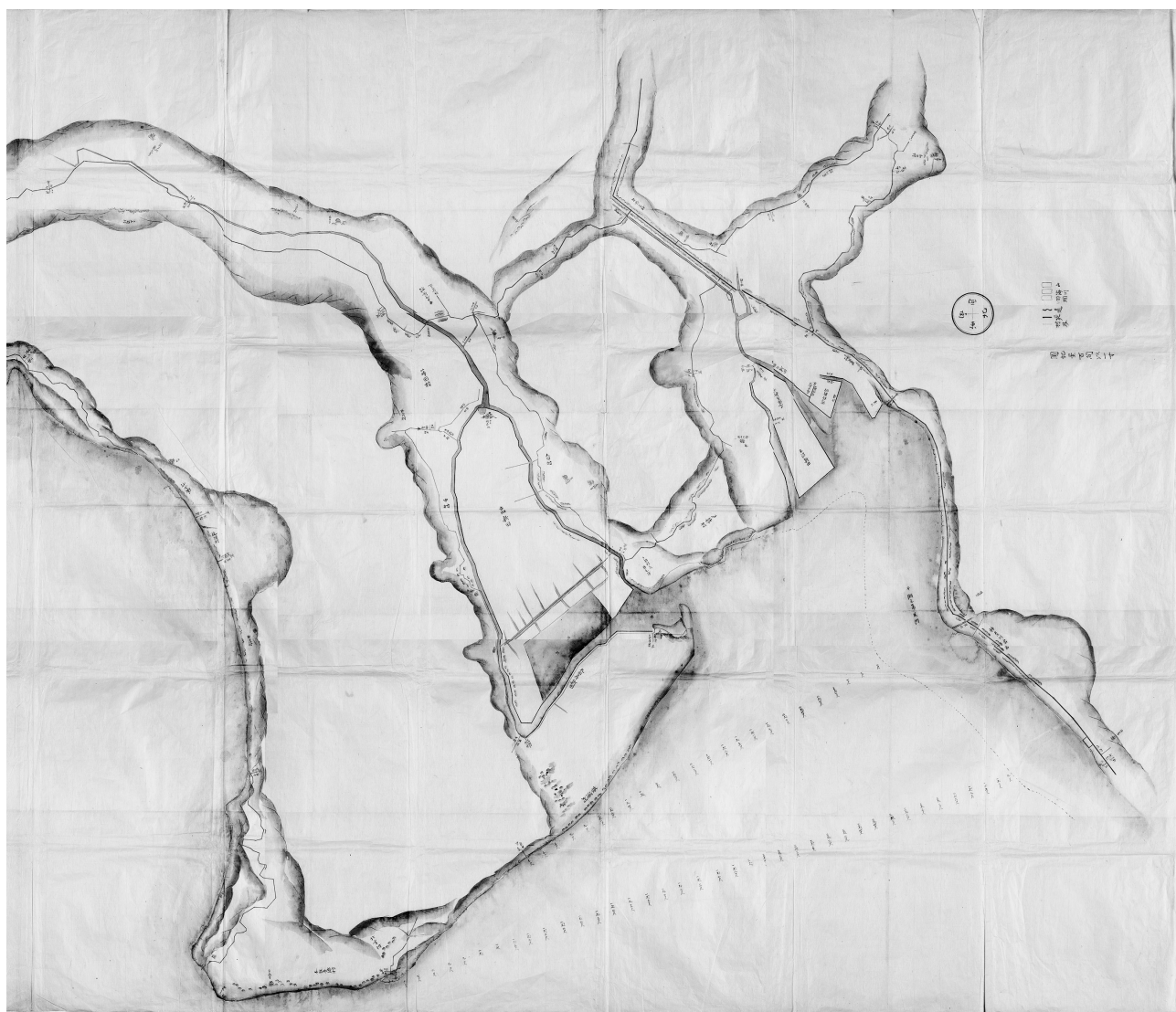


図3 「〔神奈川より金沢まで沿岸図〕」(北半分)

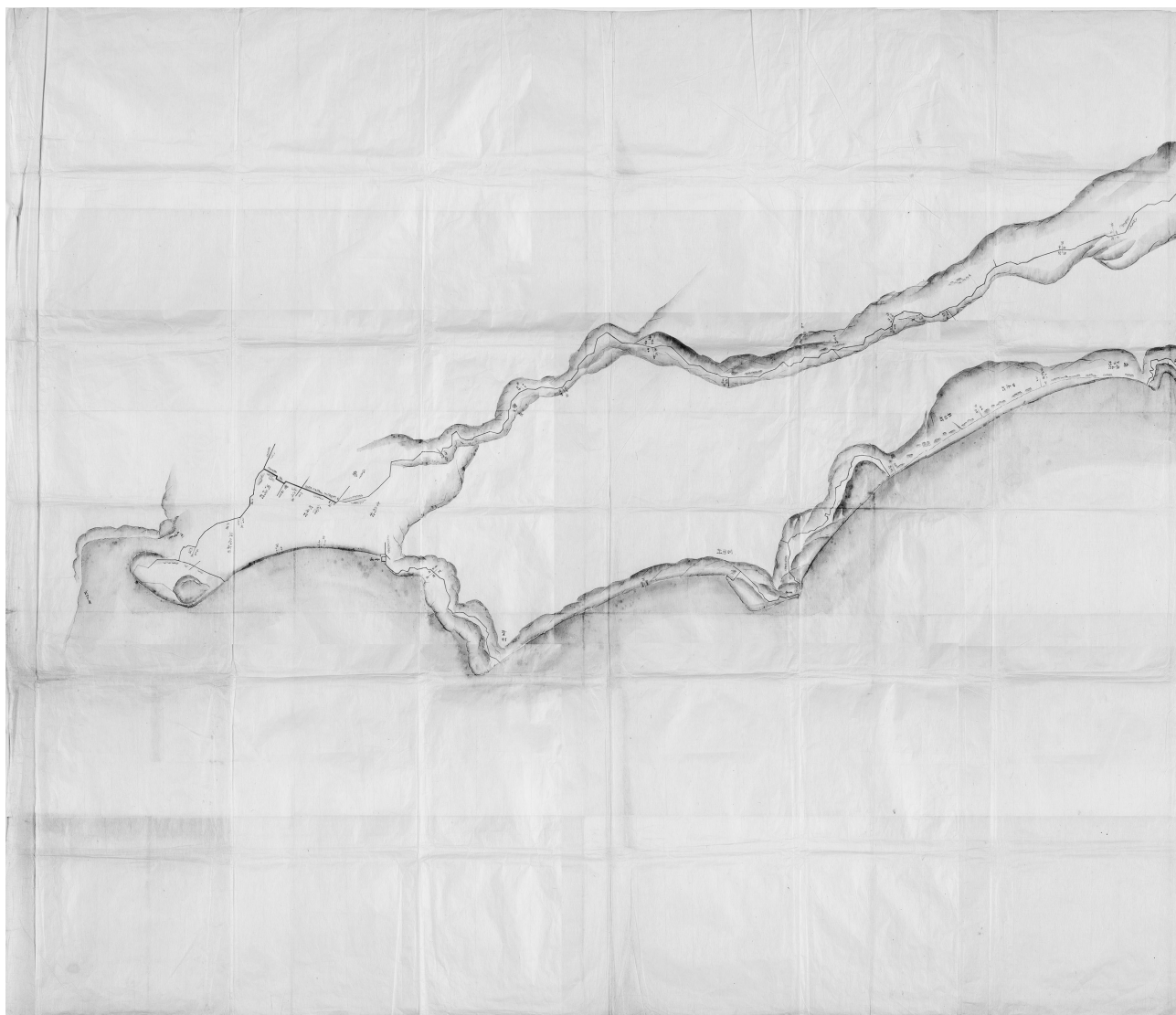


図4 「〔神奈川より金沢まで沿岸図〕」(南半分)

ら、本図は提出された正図ではなく写しと考えることができる。

道については東海道を太い赤で、その他の道路を細い赤で描く。芝生村から分かれる八王子道（和田村まで描く）、保土ヶ谷宿から分かれる浦賀道などの準幹線道路は、その中間の太さに見える部分もある。本図で描かれる範囲の各地域がどのように陸路連絡されているのか、ということは本図の重要な主題のひとつであろう。また、神奈川宿瀧ノ川沖・横浜村・北方村（現横浜市中区）境間、神奈川宿・子安村境沖・北方村・本牧本郷村（現横浜市中区）境間に水深の数値を記した直線が引かれているのも、本絵図を特徴づけている。

なお、絵図は寄託者（横浜市在住 川島憲一氏）が購入したものであり、寄託者の家に伝わった伝世資料ではない。

二、絵図の作製年代と背景

本図の作製年代と作製の背景について、酷似する絵図、本図内の書き込み、歴史資料から考えてみたい。

酷似する絵図の存在

「〔神奈川より金沢まで沿岸図〕」と同じ範囲を、本図同様の描写方法・筆致で写した絵図は管見の限り見当たらない。しかし、本図の一部分（神奈川宿・横浜村付近）に酷似する絵図が存在する。慶應義塾図書館が所蔵する「安政二卯年四五月中実測横浜金川砲台建築二付出張取調之測量地図」（四八×六六センチ、以下「金川図」とする）である。作者は図への書き込みから勝麟太郎（海舟）とされている。

「金川図」は、北は神奈川宿から保土ヶ谷宿、そして帷子川河口部

をへて戸部村・野毛浦、さらに横浜村・吉田新田までを描くが、その内容と描き方は「歴博図」に相当似通っている。たとえば、帷子川河口部の新田の形、新田の堤を太い黒で強調する描写方法、海上の洲（「干潮之節出洲」）の範囲とその文言まで同一である。ただし、この二図には左記のような違いも見られる。

・全体的に、「歴博図」に見られる地名の書き入力を「金川図」では省略している場合がある（村界・寺社名・山名・橋名など）。また、描かれている民家等の描写は「金川図」のほうが粗く、家数を減らしている部分も見受けられる。

・「金川図」では、瀧ノ川河口付近の神奈川台場建造地に黒線でその輪郭が描かれる。また、横浜村弁天社付近の海岸部と海上にも点線の囲みがある。こちらも台場建造候補地を示したものと思われるが、いずれも「歴博図」には描かれない。ただし、「歴博図」には神奈川宿・子安村境よりやや西側海岸部に黒線で示される囲みがあるが、これが台場（並木町台場）をあらわしていると考えられる（後述）。

・「歴博図」には現在の横浜港域に、水深を測った以下の二本の直線が描かれる。一、（内側）神奈川宿瀧ノ川沖（出洲の外側）から横浜・北方村境まで（全二四ヶ所、最浅地点五尺、最深地点二丈四尺）、二、（外側）神奈川宿東方沖（出洲の外側）から北方村・本牧本郷村境まで（全三九ヶ所、最浅地点六尺、最深地点三丈四尺）。水深を示す表記は「金川図」には見られない。

・「金川図」にのみ、海上にオランダ語の書き込み（「船舶投錨地」など）がある。



石州三河全圖
石州三河全圖

石州三河全圖
石州三河全圖





図5 「安政二卯年四五月中実測横浜金川砲台建築二付出張取調之測量地図」 慶應義塾図書館蔵

・「歴博図」にのみ、現在の中区元浜町付近の海岸部に「大船製造小屋場跡」との書き込みがある。

以上の差異を考えると、「歴博図」は「金川図」より先に存在し、「金川図」は「歴博図」（あるいは「歴博図」のもととなった絵図）をベースとして、作製者が必要な情報を書き加えた図と考えられる。あるいは、両図のベースになったより広域的な絵図が存在した可能性もある。

「金川図」には「安政二卯年四五月中実測横浜金川砲台建築二付出張取調之測量地図」という図題と「勝麟太郎」の名が同筆で記されており、絵図の作製年代・作製者を知る手がかりとなっている。この図題を素直に解するならば、安政二年（一八五五）四・五月に「金川砲台」（神奈川台場）建築のために勝海舟が現地に「出張」して「実測」したものと理解することができる（「実測」「測量」した対象が本図の描く地域か、あるいは台場予定地かは読み取りにくい）。しかし、勝が神奈川台場の設計依頼を受けたのは安政五年（一八五八）一二月頃と考えられるので、安政二年段階で勝が同台場建築のために神奈川近辺に出張したというのは辻褄が合わない。仮に、神奈川台場の描線・図題は安政五年以降に勝が書き加えたものと考えるにせよ⁽¹⁾、「金川図」の地図作製年代を安政二年四・五月としてよいのだろうか。

安政二年四・五月頃の海舟の動静を確認しておこう。海舟はこの年の一月一八日に調所（のち洋学所・蕃書調所）出役を命じられ、大坂近海・伊勢海岸の検分のため同二三日に江戸を出発、四月三日に帰府している。そして長崎海軍伝習所の幹部伝習生として勝に長崎派遣の命が出されたのは七月二九日である。江戸帰府から長崎出発までの間、

勝海舟は天文方の西洋書の目録作成や、オランダ献上の電信機の組み立て実演などをおこなっていたという⁽²⁾。この時期の勝は江戸にあって神奈川付近に出張することは不可能ではないが、勝や幕府関係者が横浜・神奈川（あるいは金沢まで）をこの時期に測量したという別の史料は、今回の簡便な調査では見出せていない。また後述するように、安政四年（一八五七）以降に横浜・神奈川地域への注目が高まってくることも考え合わせると、「金川図」の図題をもとに「金川図」（あるいはそのベースとなった地図）の作製年代・作製者を推断するのは現時点では控えておいたほうがよいだろう。

いずれにせよ、「金川図」と「歴博図」のもととなった実測成果は同一のものであるから、「歴博図」の成り立ちを考えるうえで「金川図」をめぐる検討は大きなヒントとなりうる。

旭日丸の艤装場

「歴博図」の年代を考えるうえで注目したのは、横浜村海岸部にある「大船製造小屋場跡」の書き込みである。「大船」とは、横浜村で艤装工事をおこなった洋式帆船旭日丸のことを指していると考えられる。

横浜村での旭日丸建造については、安達裕之「厄介丸こと旭日丸」〔『海事史研究』第四一号、一九八四年〕、菊池俊夫「横浜近代造船史・前史 旭日丸と横浜」〔『郷土神奈川』第二一号、一九八八年〕、阿部征寛「横浜村の造船所（艤装場）」〔『開港のひろば』第二六号、一九八九年〕などの成果があるが、艤装工事をおこなった具体的な場所については判然としていなかった。「歴博図」はその場所を示す貴

重な資料といえる。

嘉永六年（一八五三）十一月、幕命を受けた水戸藩は藩士鱸半兵衛を主任とし、翌嘉永七年（一八五四）正月四日から石川島において洋式帆船の建造を開始する⁽³⁾。しかし、十一月二日に進水して転覆⁽⁴⁾、船体を引き起こして進水式を挙行したのは安政二年（一八五五）正月二二日のことである⁽⁵⁾。その後、船体は横浜に移され、艤装工事が施される。

同年二月一日、前水戸藩主徳川斉昭は老中阿部正弘に「此度於佃島出来候大船御指置場にも又ハ此後大船製造の為にも不苦候ハ、浦賀辺迄之所拙家々来井水主の者遣し、岸通り深淺等測セ候ても苦かる間敷哉⁽⁶⁾」と問い合わせており、大船製造のため浦賀周辺の測量を企図しているが、横浜周辺も測量の対象としていたか否かは判然としない。

旭日丸の横浜移送決定は四月一四日のことであるが⁽⁷⁾、実際に旭日丸が横浜に移送された明確な時期は不明である。神奈川宿石井本陣に残された安政二年の「御用留」には大船製造掛が保土ヶ谷・神奈川・川崎宿間の村役人に宛てた六月一九日付の触書が収載されており、そこには「大船製造御用御材木板類風烈ニ而流木いたし候間、浦々流寄候ハ、留置、横浜村大船製造場所へ可申出候事⁽⁸⁾」とある。「横浜村大船製造場所」への報告を命じているということは、すでに旭日丸が横浜に移送されていたと考えるのが妥当だろう。そうであるならば、旭日丸の横浜移送の時期は、安政二年四月一四日から六月一九日の間ということになる。

「金川図」の書き込みにあるように安政二年四月から五月の間に勝海舟が神奈川・横浜沖を実測したとするならば、その時期は旭日丸の

横浜移送が決定した同年四月一四日から実際に移送された六月一九日以前の時期とおおよそ重なる。一方、「歴博図」の「大船製造小屋場跡」という書き込みが追筆でなく、作製時に書き込まれたとするならば、同図の作製時期は旭日丸の艤装工事完了後ということになる。

では旭日丸の艤装工事が完了し、「大船製造小屋場」が跡地になったのはいつだろうか。正確な時期は判然としないが、安政三年（一八五六）五月二三日には「横浜御船出来候間⁽⁹⁾」という状態であり、同年六月二九日夕方には旭日丸が品川沖に移動していることを確認できるので⁽¹⁰⁾、おおよそこの間に「大船製造小屋場」が引き払われたと考えられる。

また、「歴博図」には神奈川宿の子安境付近に台場の位置が黒線の囲みで示されているが、これは安政四年（一八五七）十一月に完成した並木町の台場である⁽¹¹⁾。さらに同年、薩摩藩建造の洋式帆船大元丸の修復が横浜でおこなわれ、一二月二五日には薩摩藩船手下目付岩切与兵衛が「御用船大元丸御修復場小屋」引払いの入札を安政五年（一八五八）正月三日に

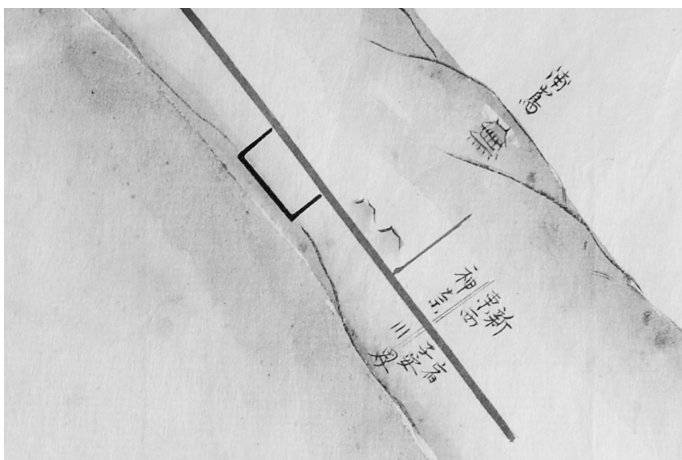


図6 「〔神奈川より金沢まで沿岸図〕」（並木台場周辺）

実施する旨、神奈川宿役人に通達している⁽¹²⁾。大元丸の作業は「製造」ではなく「修復」であるが、この修復場が旭日丸の艀装場を引き継いだものとするれば、引払いの入札後に「大船製造小屋場跡」と表現されるようになったと考えることもできよう。

以上のことから、「大船製造小屋場跡」の文言や並木町の台場が「歴博図」作製時に書き込まれたものとするならば、「歴博図」の作製時期は、並木町の台場が完成した安政四年一月以降、あるいは大元丸修復後に「御修復場小屋」が払い下げられる安政五年正月三日以降ということになるう。

開港地の模索

「歴博図」には神奈川沖の出洲から横浜・北方村境、同じく北方・本牧本郷村境までの水深が記されていることから、作製者が大型船の出入港を想定していたことは明白である。海防掛目付岩瀬忠震が横浜開港を主張したのが安政四年一月六日であることを踏まえると⁽¹³⁾、「歴博図」は幕府が横浜開港の可能性を模索する中で作製した可能性が高い。

そこで横浜開港をめぐる幕府とアメリカ総領事ハリスとの交渉過程を確認しておこう。安政四年二月四日にハリスが老中堀田正睦に提出した「日本国亜米利加合衆国修好通商条約草案」の第三条には、開港・開市候補地として大坂・長崎・平戸・京都・江戸・品川といった場所が挙げられているのみで、横浜・神奈川の記載はない⁽¹⁴⁾。

神奈川開港案がハリスに示されたのは二月一日の交渉時であり、幕府側が提案したものであった⁽¹⁵⁾。安政五年四月二三日に井伊直

弼が大老に就任し、六月一九日に岩瀬忠震・井上清直を全権として日米修好通商条約一四か条および貿易章程七か条が調印されたものの、開港地を神奈川宿と横浜村のどちらに置くかは引き続き議論されることになった。同年七月八日、幕府は海防掛を廃止し、新たに外国奉行を置いて対外事務全般を担わせた。八月四日、外国奉行等は神奈川周辺を实地見分し、幕閣での評議がおこなわれた。この評議において、神奈川については東海道が通っているため外国人が居留すると通行に支障が出る、遠浅で船着がよくないといった欠点がある一方、横浜については船着に適しているという利点があることが確認された⁽¹⁶⁾。また、「神奈川と申ハ素より一湾中を指候義二付、強而不相当之儀も有之間敷⁽¹⁷⁾」というように、神奈川・横浜を一体の空間（「一湾中」）として捉える考えが示された。しかし、外国奉行の岩瀬は条約の規定を重視する観点から、あくまで神奈川を開港するべきと反論している。結局、この時の評議では開港地候補の決定には至らなかったが、「いづれ絵図面を以談判いたし可然と存候事⁽¹⁸⁾」とされている。この段階ですでに絵図面が存在していたかどうかは確認できないが、仮に存在していたとするならば、当然この評議に用いられていたはずである。よって、この段階では絵図面は存在せず、開港地選定に有益な情報を記した絵図面が新たに作製されつつあったと考えるのが妥当ではないだろうか。

安政六年（一八五九）二月一日、外国奉行永井尚志・井上清直・堀利熙・目付加藤則著とハリスは神奈川宿本陣において開港地選定の交渉をおこなっている。この交渉に絵図面が用いられたかどうかはわからないが、交渉内容と「歴博図」の記載とが対応する部分も見受けら

れる。そこで、「山」「川」「道」「村界」「台場」など、「歴博図」を特徴付ける記載と開港地をめぐる交渉内容との相関性を探ってみよう。

ハリスは横浜・神奈川間が二里も離れ、かつ河川を挟んでいることから、幕府が推す横浜を開港地とするには山坂を造成して橋をかけるなど莫大な費用を要するとして、神奈川宿本陣から二〇〇間程離れた東海道脇、あるいは並木町の台場の周囲を造成して商館を設置したいと主張している⁽¹⁹⁾。一方、外国奉行等は横浜・神奈川間の距離については「陸路二而者、二里程隔候迎も舟路之弁利ハ宜、殊ニ此上海岸筋在来之小道を手入いたし、川筋壱ヶ所分ハ、兼而埋立候見込故、夫々出来之上者、左迄不都合之ものニも無之候⁽²⁰⁾」としており、開港地選定においては横浜・神奈川間の「山」「川」「道」「台場」の位置が論点になっている。また、将来的な開港地の拡張について、外国奉行等は「其場所ニ寄、村境或ハ寺院其外難引境内等有之候節ハ、広ヶ方差支無之共難申候⁽²¹⁾」と述べている。換言すれば、村の境界は開港地の範囲を規定する要件たり得たということである。

二月四日の交渉において、街道を付け替えなければ横浜は発展しないのではないかというハリスに対し、外国奉行等は「夫ハ心配二者不及、横浜迎も、行留り二者無之、金沢、浦賀等江之往来ニ有之⁽²²⁾」と回答している。開港地としての横浜の発展性に関する議論は道の在り様と密接不可分に結びついていたのである。「歴博図」の作製者が金沢までを描いた意図は、横浜の開放性や交通の利便性を示すことにあったのだろう。

以上のように、「歴博図」の作製時期は不明ながら、少なくとも並木町の台場が建造された安政四年一月から横浜が開港する安政六年

六月の間、海防から開港へと対外関係が変化する過渡期、開港地選定の過程において作製されたと考えるのが最も妥当であろう。

三、当該地域を描いた絵図

本「歴博図」に描かれた範囲（神奈川宿・金沢）のみを丁寧に写した絵図は珍しく、近世においては本図以外には思い当たらない⁽²³⁾。しかし、この範囲を含む絵図は開港期以前から少なからず存在する。ここでは、当該地域を描いた江戸時代後期の絵図を瞥見し、本図の位置づけを考える手がかりとしたい。

「大日本沿海輿地全図」

近世に描かれた実測的な絵図というと、まずは伊能図（「大日本沿海輿地全図」）が思い浮かぶ。寛政一三年（享和元年・一八〇一）四月二日、江戸を出立した伊能忠敬は、三浦半島、伊豆半島、そして踵をかえして東北地方太平洋岸の測量をおこなった。いわゆる「第二次測量」と呼ばれる、忠敬の初期の測量旅行である。この途次、忠敬は現在の横浜市域にも足を踏み入れ測量をおこなっている⁽²⁴⁾。その測量成果である伊能大図（「大日本沿海輿地全図」第九三図、文政四年（一八二二）、明治六年（一八七三）頃写、国立国会図書館蔵）と「歴博図」を比較すると、縮尺（伊能大図は三万六〇〇〇分の一）の関係もあってあきらかに「歴博図」のほうが精密に描かれていることがわかる。ことに、帷子川河口部や本牧・富岡・金沢八景付近の沿岸部の描き方は相当異なっている。徳島大学名誉教授平井松午氏のご教示によれば、測線の位置も伊能図と「歴博図」では異なっており、「歴博図」

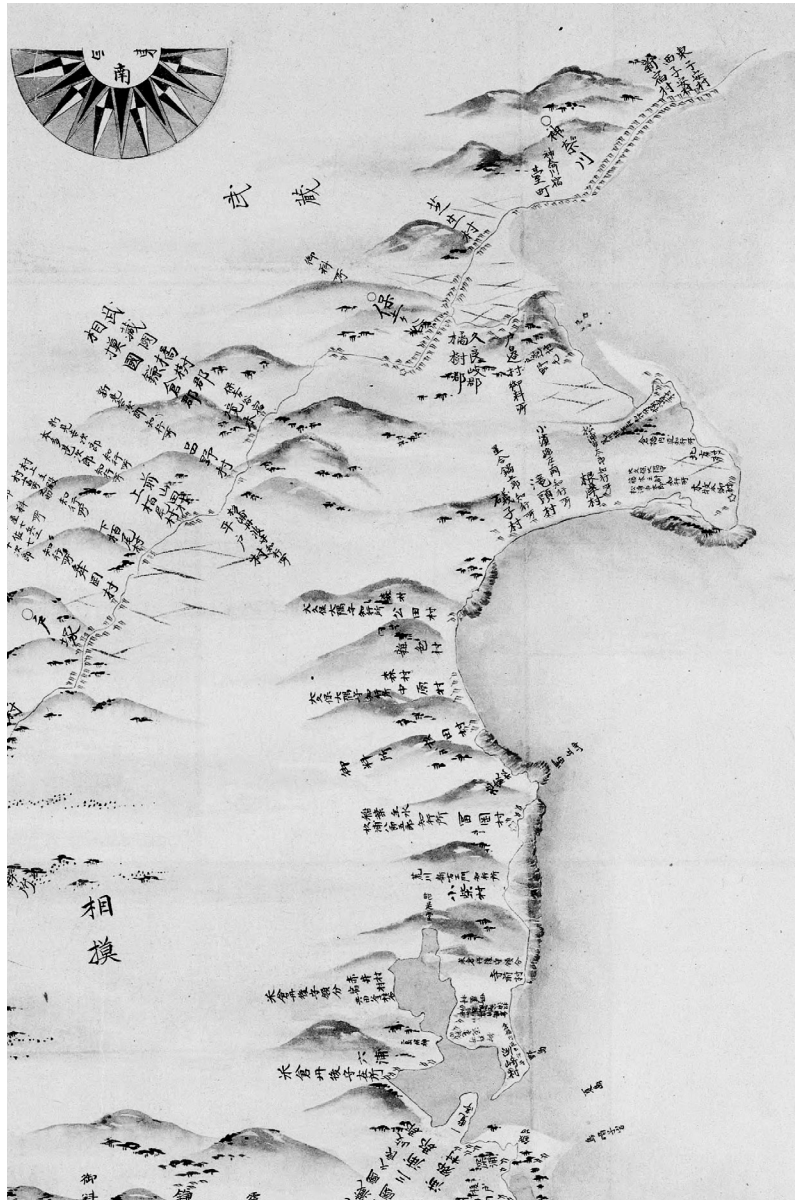


図7 「大日本沿海輿地全図」(第93図、部分) 国立国会図書館蔵

は伊能図とは別の実測図である可能性が高いという。つまり、伊能図は「歴博図」のベースとは考えられないのである。

「武蔵相模上総安房海面要路之図」

嘉永二年(一八四九)の英艦マリナー号の浦賀測量を契機として、幕府はこの年、海岸沖合の水深を測り絵図にして提出することを全国の大名・旗本に命じた^④。ことに、江戸湾(東京湾)は「首都」江戸に通じる海路であることからその防備が重要視され、沿岸部を描いた絵図が少なからず残されている。

たとえば「武蔵相模上総安房海面要路之図」(弘化四年(一八四七)〜嘉永六年(一八五三)頃、横浜市歴史博物館蔵)は、江戸湾沿岸全体を範囲として道路・地名(村名)・水深・陣屋・台場等を表示し、江戸湾の防備体制を図示するものである。神奈川・金沢の沿岸部についても、防備情報のひとつとして二点間の距離が朱線で示されているが、三浦半島・房総半島南部にくらべると書き込まれる情報は少ない。これは当時の防備の重点が江戸湾南部に置かれていたことによる

ものだろう。また、一見してわかるように、本図は「歴博図」「伊能図」より描写がおまかで、およそ実測的なものではない。

神奈川・金沢地域は、近世後期の江戸湾防備と関係して幕府の視野に入り絵図に描かれるようになるが、そのベースに実測的な地図は使用されていないのである。

「江戸湾深淺測量図」

江戸湾全体を描いた図として、「歴博図」「金川図」との関係から挙げておきたいのが「江戸湾深淺測量図」（横浜みなと博物館蔵）である。本図の作者は佐藤政養。勝海舟の門下生であり、海舟の内侍（家来・従者）という立場ながら、安政二年（一八五五）から六年（一八五九）まで長崎海軍伝習所で西洋の諸学問を学び、明治五年（一八七二）に『測量 三角惑問』という測量技術書を著した人物である。増田恒男氏は、佐藤と勝の間柄から本図が「金川図」と同時期（安政二年）に作製された可能性を指摘している⁶⁰。ただし、本図の横浜村部分に描かれる四角形が安政六年に造成された開港場を示しているように

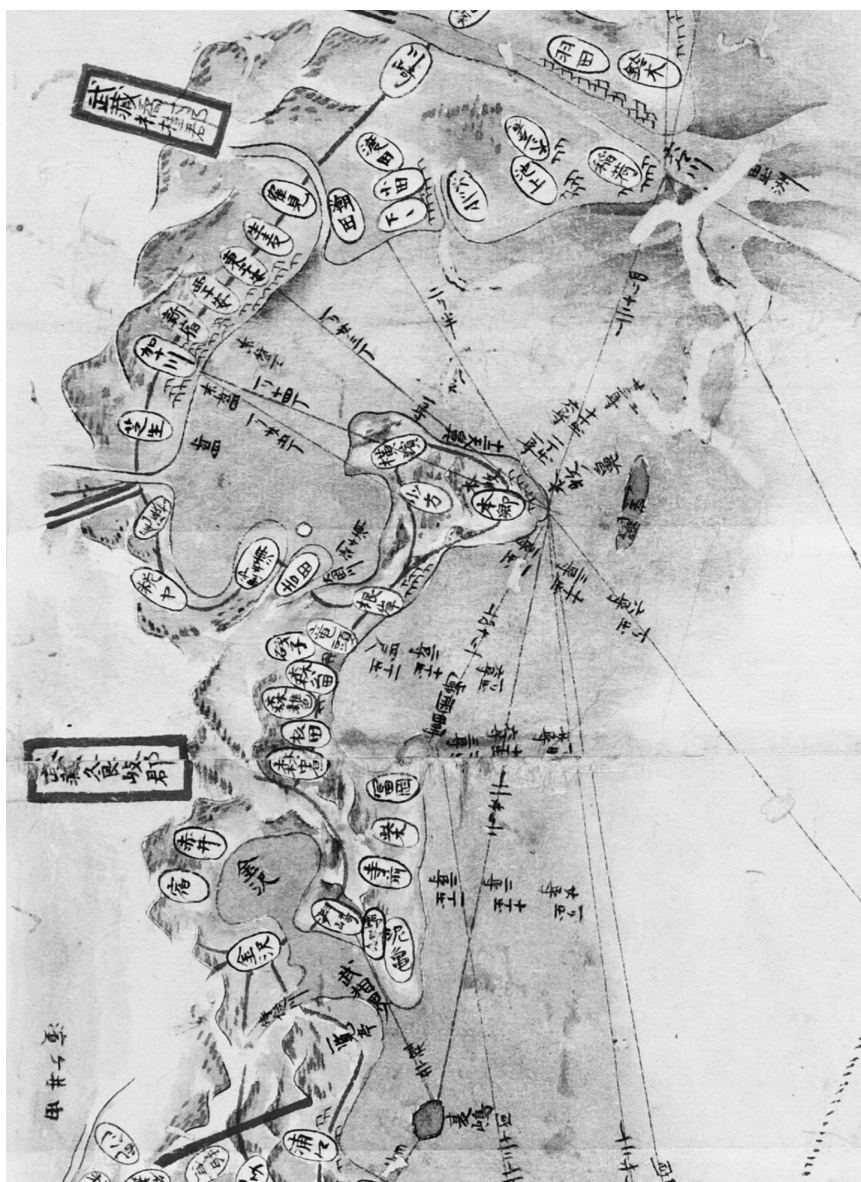


図8 「武蔵相模上総安房海面要路之図」（部分）横浜市歴史博物館蔵

も見え、作製年代については本稿では推断を控えたい。

本図は江戸湾全域にわたって水深を示した漢数字が記入されている一種の「海図」である。横浜村と神奈川宿のあいだにも水深を示したポイントが何ヶ所か見えるが、「歴博図」ほど頻繁に測深ポイントを置いておらず、また相互にデータを参照していないようである。くわえて、沿岸部や干潟(洲)の表現・範囲から「歴博図」をもとにした可能性は薄い。本図のような江戸湾・横浜周辺部の水深を示す近代海図の先駆けをとも言うべき地図は、長崎海軍伝習所の伝習生らによって、安政末年から文久期(一八六一―一八六四)に作製されていく⁴⁰。「歴博図」とは性格が異なる資料だが、「歴博図」「金川図」の成り立ちを考えるうえで念のため視野に入れておきたい絵図である。

〔御持場海岸分見画図〕

安政六年(一八五九)六月に横浜が開港されると、横浜の開港場を描く地図が多数作製・刊行されることになる。その多くは



図9 「江戸湾深浅測量図」(部分) 横浜みなと博物館蔵

実測的なものではないが、安政六年秋の作製とされる「御持場海岸分見画図」（松平文庫蔵・福井県文書館保管）は、横浜とその周辺部を実測的に描いたものとして「歴博図」との比較が必要な図であろう。

本図は幕府より横浜・本牧の警備を命じられた越前国福井藩松平家が、その担当地域を描いたものである。絵図の描写範囲は、神奈川宿と横浜道の分岐点から戸部村・野毛浦・横浜開港場、さらに本牧一帯までで、その範囲は「歴博図」より狭い。しかし、各地域の土地利用の描写が細かく、坂名・谷戸名・字名まで記されるなど情報量は「歴博図」より多い。また、海岸部や道路の描き方は「歴博図」とは異なっており、開港前後に改めて実測や聞き取りをおこなって作製されたものと考えられる。本図の作製時点においてすでに「歴博図」は成立していたと思われるが、本図のベースとして「歴博図」が使用されたようには見受けられない。

おわりに

横浜地域周辺は伊能図以降も、外国艦船の接近や横浜開港といった対外関係の情勢変化にともなって、さまざまな意図から絵図が作製されてきた。嘉永期（一八四八～一八五四）まではおもに外国艦船に対する「海防」という観点から江戸湾全域の様相が描かれ、安政六年（一八五九）の横浜開港以降は、国際貿易都市として発展する横浜開港場とその周辺地域・海域が丁寧に描写される。本図はそのふたつの時期の狭間に作製されたもので、西洋艦船の建造や開港場の選定と関係して、幕府有司が神奈川・横浜周辺部に注目しはじめた時期と重なる。

本図は神奈川宿（後の）横浜開港場・金沢という、現在の横浜地域沿岸部をおおよそカバーする範囲を、初めてひとつのフレームに入れたという点も興味深い。このフレームは、海防という江戸湾全域への視線が、横浜開港場周辺というより限定された地域に変化していく過渡期に生じている。神奈川・横浜が開港場に決定される前段階で、本図の作製を命じた者にはこの地域を一体的にとらえて細かく吟味する必要があつたのだろう。そのため、六〇〇〇分の一という大縮尺で精密に描かれた本図が残されたのである。

本図の作製年代と作製の目的については、周辺の歴史資料をさらに丹念に博捜する必要がある。そして、その博捜と本図の分析から、横浜開港の重要な前史が見えてくる可能性がある。本図は開港直前の横浜地域を精緻に観察できる貴重な絵図であるとともに、横浜が開港地に選ばれるまでの過程を考えるうえで重要な鍵ともなりえるであろう。

註

- (1) 増田恒男氏はすでに、「金川図」の図題と神奈川台場の描線は、安政五年に同台場の設計依頼を受けてから勝が書き足したのではないかと推定されている。増田恒男「神奈川台場考——（改訂稿）」（『大倉山論集』第五八輯、二〇一二年）一五三頁。

- (2) 松浦玲『勝海舟』（筑摩書房、二〇一〇年）八一頁。なお、増田恒男氏は「横浜・神奈川の測量を（安政二年四月・五月に、吉崎註記）する時間的余裕は充分あった」とし、その折におこなった調査

の成果が「安政二卯年四五月中実測横浜金川砲台建築ニ付出張取調之測量地図」であると述べている（増田前掲論文）。

- (3) 『水戸藩史料』上編乾（吉川弘文館、一九七〇年）一二二頁。
- (4) 色川三中／中井信彦校注『片葉雜記 色川三中黒船風聞日記』（慶友社、一九八六年）一七八頁。
- (5) 前掲『水戸藩史料』上編乾、一二六頁。
- (6) 維新史料編纂事務局編『大日本維新史料稿本』安政二年二月一日条（東京大学史料編纂所蔵、AN〇二六―一〇三八）。
- (7) 西野宣明「松寓日記」（国立国会図書館所蔵）。
- (8) 安政二年「御用留」（神奈川県本陣石井家文書・神奈川県公文書館所蔵、横浜開港資料館複製本Ca五 〇二―三一）。
- (9) 前掲『大日本維新史料稿本』安政三年五月二三日条、AN〇五四―五〇四。
- (10) 前掲『大日本維新史料稿本』安政三年六月二九日条、AN〇五四―四九六。
- (11) 桑原真人・田中彰編著『平野弥十郎幕末・維新日記』（北海道大学図書刊行会、二〇〇〇年）一五二頁。
- (12) 安政四年「御用留」（神奈川県本陣石井家文書・神奈川県公文書館所蔵、横浜開港資料館複製本Ca五 〇二―三一）。
- (13) 東京大学史料編纂所編『大日本古文書 幕末外国関係文書之十八』八九号（復刻、東京大学出版会、一九七二年）五四八頁。
- (14) 同右・一七三号、五二四頁。
- (15) 同右・一七八号、五四八頁。
- (16) 同稿『大日本古文書 幕末外国関係文書之二十一』一三七号（同）

二六〇・二六一頁。

- (17) 同右、二六一頁。
- (18) 同右。
- (19) 同稿『大日本古文書 幕末外国関係文書之二十二』一〇一号（同、一九七三年）二七一・二七二頁。
- (20) 同右、二七三・二七四頁。
- (21) 同右、二七六頁。
- (22) 同右・一一五号、三三六頁。
- (23) ただし、ひじょうに粗いものだが、「図面之事（金川横浜へ開港洲干へ商館普請地取并最寄高低道路絵図面）」（安政六年三月、神奈川県立公文書館寄託、武蔵国久良岐郡松本村金子家文書）は、神奈川県から横浜村・本牧周辺をへて金沢までを描いている。画像は横浜開港資料館編『開港前後の横浜 1858～1860』（公益財団法人横浜市ふるさと歴史財団、二〇一九年）二二頁を参照のこと。
- (24) 佐久間達夫校訂『伊能忠敬測量日記』第一卷（大空社、一九九八年）。
- (25) 横山伊徳「一九世紀日本近海測量について」（黒田日出男他編『地図と絵図の政治文化史』東京大学出版会、二〇〇一年）二九〇頁。
- (26) 増田恒男『佐藤政養とその時代―勝海舟を支えたテクノクラート―』（山形県遊佐町、二〇二〇年）二七頁。
- (27) 志澤政勝「幕末明治の横浜港の海図」（『横濱』（神奈川県新聞社）Vol.五〇、二〇一五年）。

神谷大介・吉崎雅規（ともに横浜開港資料館調査研究員）